

第2問

次の文章は、加賀乙彦の小説「雨の庭」の一節である。彼の一家は、長年住み慣れた家屋敷を手放して近所の高層住宅に引越しをした。以下の文章は、それから三か月ほど経った六月の雨の日、旧居を訪れた「彼」が、引越しの日に庭で燃やした焚火のあとを見ながら追憶にふける場面である。これを読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(配点 50)

あらかた荷物の片付けが終わったところで弟がひとつサヨナラ・パーティーをやるうじやないかと提案した。三月半ば、春とはいえ寒波が襲った肌寒い日に一家眷族、つまり父と母、彼夫婦と息子、弟夫婦に姪と甥が八畳間に集った。彼と弟は酔って馬鹿陽気に笑いこけた。母は珍しく酒をすこし、息子たちの笑いに誘われて笑っていたのに、ふと顔を曇らせると声をあげて泣きはじめた。びつくりしたのは子供たちである。荷造りのすんだ段ボール箱や食器棚を利用して隠れん坊に興じていた子供たちはおぼ

あちやまの異変に立ちすくんだ。妙に白けた宴は、妻が気をきかして移り住む先のアパートの美質を、鍵一つで外出できるとか掃除が簡単だとかを語り始めたため再びさびさびした。そんな一回の動きに終始無縁でいたのは父である。父はみんなの会話からは全く取残され、人黙々と料理をつついていたが、やがて縁側に立ち水虫の足裏の皮をむきはじめた。そんな父を弟が

おひやらかしたけれど父は動じなかった。耳が遠いからな、きこえんのだよと彼が大声で言っても父は振向きもしなかった。その時父が何を考えていたかを彼はおぼろげに分るような気がする。父の七十年の全生涯はこの一軒の家で過ぎたのだ。それが今確実に消えようとしている。その気持を表現するのなら黙り込む以外にないのかも知れない。

いよいよ当日になった。母に息子をあずけると妻は運送屋の指揮をひきうけた。荷物を選別しトラック内の場所を指定し、大

の男たちを意のままに動かす、そんな妻の能力に彼は瞠目した。女たちの有能ぶりと対照的に男たちは無能であった。彼は塵芥を土間に掃きおろしたあとすることが見付からず、庭にぼんやり立っていた父の傍に並んで立った。いよいよおわりだな、と言うと父は頷き、それからあわてて家の中にあがりこんだ。しばらくして父は両腕に電球をかかえて出てきた。父は照れくさそうに、しかし相変らずにこりともせず、これだつて残しておくのは惜しいからな、と言った。

庭に集めた塵芥をどうするかで彼は父と争った。どうせ他人に渡すのだからこのまま放置すればと彼が主張すると、きれいに

当日 追憶 40 45 マテ